

1 3	豊橋	豊橋市立天伯小学校	アマノ ユウト	
			名 前	天 野 雄 仁
分科会番号	1 2	分科会名	自治的諸活動と生活指導（小学校）	

研究題目

学級目標を軸とした継続的な学級活動を通して、主体的に集団づくりに参画する児童の育成

1 主題設定の理由

小学校学習指導要領において特別活動は、「よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度」を育成するとともに、集団や社会の形成者として必要な資質・能力を育むことを目標としている。特に学級活動では、児童が学級や学校生活における課題を見いだし、仲間と話し合いながら解決に向けて実践することを通して、主体的に社会に参画する力を育成することが求められている。新型コロナウイルス感染症の流行以降、学校現場では多くの教育活動が見直され、学校行事や異学年交流活動などが大幅に縮小・精選された。行事の精選は教育活動の効率化という面で一定の成果をもたらした一方で、子どもたちが仲間と協力しながら企画・運営に関わり、試行錯誤を重ねながら達成感を味わう機会の減少にもつながった。また、教育活動が通常の形に戻りつつある現在においても、学校行事の中には保護者へ成果を発表することが主な目的となり、子どもたちは与えられた役割をこなすことに終始してしまう場面が少なくない。行事を成功させることが優先されるあまり、子どもたち自身が課題を見つけたり、活動内容を話し合ったり、自ら企画や運営に関わったりする機会が十分に確保されていない現状がある。その結果、「自分たちの手で集団をよりよくしていこう」という自治的な意識や主体性を育む場面が少なくなっているのではないかと考える。

本学級の児童は、新しい活動への関心が高く、友達を思いやる温かな人間関係を築いている。一方で、自分の考えを全体場で発信することに苦手意識をもち、教師の指示を待つ受け身な姿も見られる。また、学級をよりよくしたいという思いはあるものの、その思いを具体的な行動に結び付ける経験は十分とは言えない実態があった。そこで、児童が自分たちの学級の現状を知り、課題を見つけ、仲間と協力しながら改善に向けて動く経験を積み重ねることが必要であると考えた。学級という最も身近な集団の中で、自分たちの課題を自分たちで考え、仲間と協働しながら解決しようとする過程を継続的に経験することで、主体性や自治的能力、自己有用感を育むことができると考えた。本研究では、このような経験を年間を通して積み重ねることで、児童一人一人が学級づくりの主体として成長し、自らの力で集団をよりよくしようとする態度を育成したいと考え、本主題を設定した。

2 研究の計画

(1) 仮説

児童自身が決定した学級目標を軸に学級の現状を振り返り、課題について継続的に話し合い、その解決に向けた活動を企画・実践する場を設ければ、児童は学級の課題を自分事として捉え、仲間と協働しながら主体的に集団づくりに参画することができるだろう。

本研究では、主体的に集団づくりに参画する児童の姿を、次の2点とした。

- ① 学級の課題を自分事として捉え、自ら考え行動する児童
- ② 仲間と協働しながら自分のよさを生かし、集団に貢献できる児童

これら2つの児童像は、学級目標の達成に向けて児童が自ら課題を把握し、仲間と力を合わせながらよりよい学級を創り出すために必要な力である。本研究では、この2つの力を段階的かつ相互に関連させながら育成することを目指す。

(2) 手だて

本研究では、上記2つの児童像を育成するために、次の2つの手だてを設定する。

① 学級の課題を自分事として捉え、自ら考え行動するための「アンケート」と「学級会」

4月の学級開きでは、「どんな学級にしたいか」について児童同士で話し合い、学級目標とともに、その願いを具体的に確かめられるようにアンケート項目を児童とともに設定する。自分たちで決めた項目をもとに毎月アンケートを行い、結果をレーダーチャートで可視化することで、児童は学級の現状を客観的に把握し、課題に気づくことができるようにする。

さらに、アンケートの結果を学級目標に照らして振り返ることで、児童は「自分たちがめざした姿」に常に立ち返りながら学級の課題を捉えることができる。可視化された結果をもとに学級会を開き、「よい点」「改

善したい点」「次に取り組むこと」について児童自身が話し合う場を設ける。

また、話し合いの内容や1か月の活動を整理して、学級に掲示することで、児童が自分たちの願いのこもった学級目標に立ち返りながら、継続的に取り組みを振り返ることができるようにする。この一連の流れを繰り返すことで、児童は学級の課題を自分事として捉え、学級目標を軸に学級づくりに参画しようとする姿を育んでいこう。

②友達と協働しながら課題解決に取り組む、自分のよさを生かして集団に貢献するための「学級行事」

学級会で決定した改善策や目標を実現するために、児童が中心となって毎月「学級行事」を企画・運営する。活動では、「目的の設定」「役割分担」「準備」「運営」「振り返り」までを児童自身が行うようにし、互いの考えを尊重しながら協力して課題解決に取り組む経験を積めるようにする。

さらに、活動の対象を学級内だけでなく低学年児童や保護者へ広げることで、自分たちの取組みが周囲の人々の役に立つ経験を得られるようにする。これは、児童が自分のよさを発揮し、他者に貢献する喜びを感じる重要な機会となる。一人一人の得意や個性を発揮できる活動を意図的に取り入れることで、児童が自分の力を学級のために生かす経験を積むことができる。

これらの交流活動や行事を通して、児童は仲間と協働しながら自分のよさを生かし、集団に貢献する姿へと成長していこう。

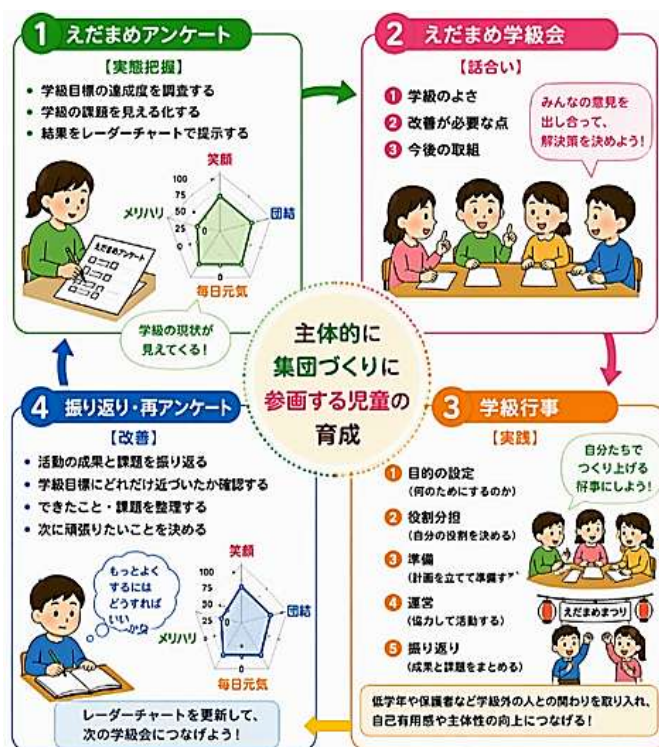
2つの手立てをまとめたものが【資料1】である。

(3) 抽出児Aについて

A児は友達との関わり自体は好むものの、学級の中で自分の考えや思いを積極的に表現することに苦手意識をもつ男子児童である。話し合いの場面では「なんでもいい」と発言するなど、自分の意見を示すことを避ける姿が多く見られ、周囲の男子児童の意見に合わせることが多かった。また、場面に応じた言葉遣いを選ぶことが難しく、強い言い方になってしまうことがあり、友達との関係がぎくしゃくする場面も見られ、特に女子児童を苦手としている。こうしたことから、A児は人間関係を円滑に築くことに課題を抱えていると考えられる。また、本校では、全校児童が「なかよしアンケート」(生徒指導主任から提案されたアンケート)を毎月実施しており、A児は、「学校は楽しいですか」という項目に「楽しくない」や「どちらかといえば楽しくない」と回答することが多く、学校生活に対する満足感や所属感の低さが顕著であった。4年次には、すべての月で1(楽しくない)や2(どちらかといえば楽しくない)を選択しており、学校生活を肯定的に捉えられていない状況が続いていたことがうかがえる【資料2】。5年生4月の時点でも「楽しくない」と回答しており、新しい学年のスタートにおいても気持ちが前向きになりきれていない様子が見られた。

さらに、4月末に実施した「えだまめアンケート」では得点率が64%であり、学級平均(78%)を下回っていた。特に、「自分の意見を伝えること」や「学級のために進んで行動すること」に関する項目の自己評価が低く、「自分は学級の役に立っている」という実感を十分にもてていないことが読み取れた。

そこで、本研究では「学級会」や「学級行事」の中で、A児が安心して自分を表現できる場面を設定し、仲間から認められる経験を積ませたいと考えた。また、一人一人の得意や個性を生かせる活動を取り入れることで、A児が自分の力を仲間のために発揮できる場面を増やし、「自分も学級づくりの一員として役に立っている」という実感を高めたいと考えた。こうした経験を積み重ねることで、A児が学校生活への満足感や自己有用感を育み、主体的に集団づくりに参画しようとする姿へとつながることを期待する。



【資料1】学級活動の毎月のサイクル



【資料2】学校は楽しいですか? (A児4年)

4年次には、すべての月で1(楽しくない)や2(どちらかといえば楽しくない)を選択しており、学校生活を肯定的に捉えられていない状況が続いていたことがうかがえる【資料2】。5年生4月の時点でも「楽しくない」と回答しており、新しい学年のスタートにおいても気持ちが前向きになりきれていない様子が見られた。

3 研究の実際

(1) 4月 学級目標の設定と自治的活動のスタート

新しい学級がスタートした4月、児童は「仲良く過ごしたい」「学校で一番楽しい学級になりたい」「いじめのない学級にしたい」「いじめのないクラスにしたい」など、学級への願いを語った。学級会では、児童が一人一人の願いを出し合い、それらを整理しながら学級目標「We can えだまめ (笑顔・団結・毎日元気・メリハリ)」に決定した。また、学級目標の達成度を定期的に確認するために、児童一人一人の願いをアンケート項目に加えた「えだまめアンケート」を作成し、毎月の学級の姿を可視化することにした。さらに、アンケート結果をもとに課題を話し合う「えだまめ学級会」、そして学級目標に近づくための「学級行事」を毎月行っていくことを決めた。その過程をイメージするための学級掲示を作成した【資料3】。

A児はこの段階では、学級の話し合いに参加しながらも、自分の意見を述べることに不安を抱えていた。4月の「なかよしアンケート」の「学校は楽しいですか?」の項目では1(楽しくない)を選択しており、学校生活への満足感や所属感が低い状態であった。「えだまめアンケート」でも得点率 64% と学級平均を下回り、特に「自分の意見を伝えられる」「学級のために行動できる」「前向きな言葉を使える」などの項目が1~2点と低かった。A児は「自分の意見を言ってもいいのだろうか」「間違えたらどうしよう」という不安を抱えていたと推察される。4月の振り返りには、「言ったら変に思われるかもしれない。だから、今日はあまり言えなかった。」と記入した。

(2) 5~7月 前向きな姿勢が芽生えるA児

5月の学級会では、児童から「もっとみんなが笑顔になれる学級にしたい」という意見が多く出された。そこで、児童は自分たちで楽しめる行事として「えだまめ夏祭り」を企画し、射的や塗り絵、ミニゲームなどのコーナーを準備した。当初は自分たちだけで楽しむ予定で準備を進めていたが、せっかく工夫してつくった活動を誰かにも喜んでもらいたいという思いが高まり、教師が低学年を招待してみてもどうかと提案した。児童はその提案を受け入れ、「来てくれた人を笑顔にしたい」という願いをもって準備を整えた。当日は多くの低学年児童が訪れ、活動後に児童が達成会を得られるようにするために参加した低学年の担任に手紙を書いてもらうよう依頼した。「ありがとう」「5年だいすき」などの心のこもった手紙を受け取った児童は、とて



【資料3】1年のゴールをイメージするための学級掲示

も嬉しそうな表情を見せ、自分たちの活動が誰かの喜びにつながったことを実感していた。月末には再びアンケートを行い、1か月の活動が振り返れるような掲示を作成した【資料4】。この行事の後に実施した5月末A児のアンケートでは、「笑顔」の得点率が56%→63%に向上した。行事で「誰かを笑顔にする経験」をしたことが、自己評価の変化につながったと考えられる。夏祭りの振り返りには、「2年生が楽しそうにしてくれてうれしかった。女子がけっこうがんばってくれた。もっと協力したい。」と記入した。

6月の学級会では、「もっと元気に発表できるようになりたい」「自分たちの得意なことを発表したい」という声が上がった。そこで、児童は自分の特技を発表する「New Star Fes」を企画した。A児はルービックキューブの発表に挑戦し、60秒以内に全面をそろえる姿に大きな拍手が起こった【資料5】。この経験はA児にとって「自分がみんなに認められている」という実感につながったと考えられる。6月末のA児アンケートでは、「毎日元気」の得点率が63%→69%に向上した。A児は振り返りに「こんなに拍手をもらったのは初めてで嬉しかった。もっといろんなことに挑戦したい。」と記入した。

7月は猛暑の影響で予定していた行事が変更となったが、児童は話し合いで「今できることを考えよう」と前向きに決定し、いじめ防止をテーマにした映画づくりに挑戦した。A児は先生役として参加し、上映会では多くの児童が集まり、達成感を味わった。7月末A児のアンケートでは、「メリハリ」の得点率が75%→88%に向上した。これは、映画づくりで「役割を果たす経験」をしたことが、自己評価の変化につながったと考えられる。振り返りには「映画で先生役をやったのが楽しかった。みんなが笑ってくれてうれしかった。」と記入した。

(3) 9～12月 仲間のために動き始めるA児

9月の学級会では、「もっといろんな人に見てもらいたい」という意見が出され、「第2回New Star Fes」を企画して他学年や保護者も招待する形に発展した。A児は再び特技を発表した。9月末のアンケートでは、「団結」の得点率が88%→96%に向上した。A児は振り返りに「前より自分から動けるようになった。みんなのために準備するのが楽しい。もっと役に立ちたい。親や違う学年の人が来てくれて緊張したけど嬉しかった。」と記入した。

10月の学級会では、「発表が苦手な人も安心して参加できる学級にしたい」という意見が出され、カラオケ大会やオリジナルあいさつ運動などの活動が行われた。A児は「ベテルギウス」を歌い、盛り上げ係としてボンボン作りにも取り組んだ。

12月には学級の魅力を伝える「えだまめ The Movie」を制作した。A児は学級会で、特別支援学級の「B君」が好きなマツケンサンバをみんなで踊っている映像を撮りたい」と提案し、仲間の思いを尊重した意見が採用された。12月末のアンケートでは、「毎日元気」の得点率が69%→100%に到達した。「自分の意見が採用されたのがうれしかった。B君も喜んでくれてよかった。もっとみんなのためにできることを探したい。」と記入した。

(4) 1～3月 未来への希望を育むA児

年度末のアンケートでは、A児の全体の得点率が64%→95%と大きく向上した。児童からは「行事を自分たちで作るのが楽しかった」「学級のために頑張れた」という声が多く聞かれた。A児は振り返りに「前は学校があんまり楽しくなかったけど、今は楽しい。みんなと協力していろいろできたから。6年生でも自分から意見を言って、もっとよい学級にしたい。」と記入した。



【資料4】1か月を振り返る5月の活動の掲示



【資料5】発表するA児

4 研究の成果

(1) 学級の課題を自分事として捉え、自ら考え行動するための「アンケート」と「学級会」

毎月実施した「えだまめアンケート」は、児童が学級の現状を客観的に把握し、自分たちの学級の姿を数値として受け止める機会となった。数値化された結果をもとに行う学級会では、「なぜこの数値になったのか」「次にどんな行動が必要か」を児童自身が話し合い、改善策を自分たちで決定することを重視した。この一連の流れは、児童が学級の課題を自分たちの問題として捉え、よりよい学級づくりに主体的に参画する態度を育むうえで役割を果たした。特に、12月の学級会では、アンケートで示された学級の課題を踏まえ、A児が「B君が喜ぶなら、みんなでマツケンサンバを踊りたい」と自分から提案した。アンケートで学級の姿を客観的に把握し、その結果をもとに話し合うという流れの中で、A児は仲間の思いを自分事として受け止め、自分の考えを言葉にして伝えることができた。この提案は学級のみんなに受け入れられ、実際の活動として実現した。A児が友達の思いを自分のことのように感じ、学級の活動に生かそうとした姿は、「アンケート」と「学級会」が児童の自分事化を促し、行動につながる力を育てたことを示している。

A児のアンケートの数値にも、学級の見え方の変容が表れている。A児は4月には「毎日元気よく大きな声で発言ができる」を2点、「人の話をうなづいて聞ける」を2点と捉えていたが、12月にはどちらも4点にまで向上している。これは、A児が学級を「自分の意見を安心して伝えられる場」「仲間の話を受け止めながら話し合える場」として肯定的に捉えるようになったことを示している。

これらの変容は、アンケートで学級の姿を把握し、学級会で自分の言葉で課題を語り、その後の行動を自分で決めて動くという一連の流れが、A児の学級に対する見え方を肯定的に変え、学級づくりへの参画を支えたと考えられる。

(2) 友達と協働しながら課題解決に取り組み、自分のよさを生かして集団に貢献するための「学級行事」

「学級行事」を児童主体で企画・運営したことは、児童が仲間と協力しながら課題解決に取り組む経験を積み場となった。行事の準備、役割分担、運営、振り返りを自分たちで行う過程は、児童が「自分の力を仲間のために使う」ことの価値を実感する機会となり、協働的な態度の育成につながった。

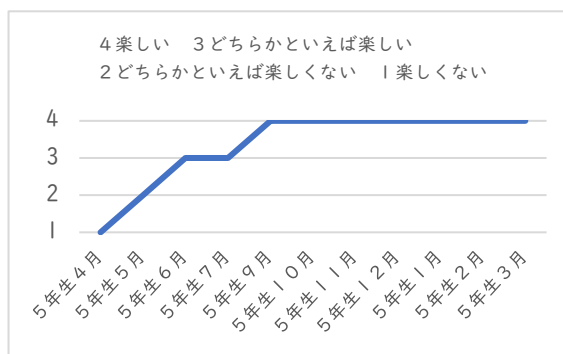
A児は、5月の「えだまめ夏祭り」で低学年児童を笑顔にする経験をし、6月の「New Star Fes」では自分の特技を発揮して仲間から認められる経験をした。さらに、7月の映画づくりでは役割を果たし、9月の「第2回 New Star Fes」では、他学年や保護者が参観する行事づくりの経験を重ねた。これらの「学級行事」は、A児にとって「自分の行動が仲間や周りの人の役に立った」と感じられる経験の積み重ねとなり、友達のために動こうとする気持ちを強めるきっかけになった。

アンケートの数値にもその変容が表れている。A児は4月には「頑張っている人を応援できる」を1点と捉えていたが、12月には4点にまで向上している。これは、行事で仲間の頑張りに触れ、協力し合う経験を重ねる中で、A児が学級を「互いの頑張りを認め、応援し合える場」として肯定的に捉えるようになったことを示している。

さらに、「学校は楽しいですか？」の回答が、9月以降すべて4（楽しい）で安定したことは、協働的経験が学校生活への満足感を強く支えたことを示す指標である。【資料7】A児は「前より自分から動けるようになった。みんなのために準備するのが楽しい。もっと役に立ちたい。」「前は学校があんまり楽しくなかったけど、今は楽しい。みんなと協力していろいろできたから。」と振り返っており、仲間のために動くことそのものに喜びを感じるようになったことがうかがえる。

We can えだまめ アンケート集計結果 A児											
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月			
1 頑張っている人を助けてあげられる学校です	1	1	2	3	3	4	4	4			
2 みんなで好きな歌をうたう学校です	2	2	3	2	3	3	3	3			
3 好きな歌をうたうことができる学校です	3	3	2	3	3	4	4	4			
4 人の話をうなづいて聞ける学校です。質問や意見を言う学校です	3	3	1	2	3	1	3	4			
実績 総合率	56	56	50	63	75	75	88	94			
5 仲間の話を聞いてあげられる学校です	1	1	3	3	4	3	3	3			
6 みんなでうたがうことができる学校です	1	1	2	2	3	3	3	3			
7 3人グループで歌に挑戦できる学校です	4	4	4	3	4	3	3	4			
8 みんなで歌をうたうことができる学校です	2	2	3	2	3	3	3	4			
記録 総合率	50	50	75	63	88	75	75	88			
9 自分自身よく頑張っている学校です	3	3	3	3	3	4	4	4			
10 仲間の話を聞いてあげられる学校です	4	4	2	2	3	4	4	4			
11 仲間の話を聞いてあげられる学校です	3	3	3	3	3	4	4	4			
12 仲間の話を聞いてあげられる学校です	2	2	2	2	2	4	4	4			
確認 総合率	75	75	63	63	69	100	100	100			
13 頑張っている人を助けてあげられる学校です	3	3	3	3	3	4	4	4			
14 仲間の話を聞いてあげられる学校です	3	3	4	2	3	3	4	4			
15 みんなで歌をうたうことができる学校です	2	2	3	3	4	4	4	4			
16 仲間の話を聞いてあげられる学校です	4	4	4	4	4	4	4	4			
メリハリ 総合率	75	75	88	75	88	94	100	100			
全体の総合率	64	64	69	66	80	86	91	95			

【資料6】A児のえだまめアンケートの結果



【資料7】学校は楽しいですか? (A児5年)

(3) 2つの働きかけの相互作用による総合的な成長

本研究は、「アンケートと学級会」と「学級行事」という二つの手だてを循環させて児童の成長を支援した。アンケートと学級会では、児童が学級の課題を自分事として捉え、自分の言葉で改善策を考え、行動を選び取る経験を重ねた。学級行事では、話し合いで決めた改善策を実際の活動として形にし、仲間と協力しながら課題解決に取り組む経験を積むことができた。

A児はこの二つの働きかけの往復の中で、主体性と協働性を段階的に伸ばしていった。学級会で自分の意見を伝える経験を重ねることで、「自分の考えを言ってもよい」という安心感が育ち、行事ではその考えを仲間のために生かす場面が増えた。特に、12月の学級会でA児が特別支援学級のB君のために「マツケンサンバを踊りたい」と提案し、その意見が学級全体の活動として採用された場面は、二つの働きかけがA児の変容につながった出来事であると考えられる。話し合いで生まれたA児の思いが、行事という実践の場で仲間の喜びにつながり、その経験が再びアンケートの数値や自己評価の向上として返ってきた。

こうした循環を繰り返す中で、A児は「自分の行動が学級のためになる」という実感を強め、主体的に学級づくりに参画しようとする姿へと成長した。年度末の振り返りでA児が「前は学校が楽しくなかったけど、今は楽しい。みんなと協力していろいろできたから。6年生でも自分から意見を言って、もっとよい学級にしたい」と記したように、A児は学級の一員としての自分の存在を肯定的に捉え、未来に向けて主体的に行動しようとする意欲をもつまでに変容した。

このように、アンケートと学級会による自分事化の促進と、学級行事による協働的貢献の経験が相互に作用しながら、A児の主体性・協働性・自己有用感を総合的に高めたと考える。

5 今後の課題

今回の実践では、休み時間を効果的に活用したことで、子どもたちが準備や話し合いを進められる時間を確保することができた。学級という小さな集団であったからこそ、活動のテンポがよく、行事の準備が滞らずに進んだことは大きな利点であった。また休み時間に準備や練習を行うことで、休み時間の充実度が高まり、結果としてトラブルが減少し、学級の落ち着きが向上した。こうした自治的な雰囲気の高まりはアンケートの数値にも表れている。【資料8】

一方で、このような活動のテンポや熱量は、学級単位だからこそ実現できた側面もある。同じ学年の他学級と比べると、活動への意欲や進め方に違いがあり、学級間で「取り組みの勢い」や「活動量」に差が生まれていることが見受けられた。他学級と合同で活動しようとする、スピードを合わせる事が難しく、話し合いや準備の進行がゆっくりになる場面もあった。

さらに、年度末に行った「思い出に残っている行事は何ですか?」のアンケートの結果を見ると、子どもたちが主体的に企画・運営した行事(New Star Fes, 映画づくり, 夏祭りなど)が上位を占めており、学校主導の行事(運動会, 学習発表会, 縦割り遠足など)は票数が少なかった【資料9】。この結果は、子どもたちが「自分たちでつくった行事」に強い満足感や達成感を抱いていることを示している。つまり、主体的に関われる活動ほど、子どもたちの記憶に残り、学級への所属感や自己有用感を高める効果が大いと考えられる。

今後は、本学級で育った主体性や協働性を学年・学校全体へ広げていくために、学校行事そのものを子ども主体の活動へと再構成していく必要がある。教師が中心となって進める従来の形式から、子どもたちが目的を考え、内容を決め、準備や運営に参画できる形式へと段階的に移行することで、どの学級でも児童が主体的に参画できる環境を整えることができる。学級間の温度差を縮めながら、学校全体として自治的な文化を育てていくことが今後の課題である。

	4月	5月	6月	7月	8月	10月	11月	12月
1. 友達とよく話をし合っている学級です	76	87	88	88	88	100	100	100
2. みんなの意見を聞いて決める学級です	75	82	93	91	89	93	93	93
3. 学級の活動が楽しく進んでいる学級です	79	92	92	95	91	99	99	99
4. 先生だけでなく自分たちで決める学級です	62	67	72	79	76	79	87	89
5. 先生とよく話をし合っている学級です	73	82	87	88	88	93	95	95
6. 先生に話を聞いて決める学級です	75	84	88	95	95	97	97	97
7. みんなの意見を聞いて決める学級です	82	88	88	89	82	95	95	95
8. みんなの意見を聞いて決める学級です	85	92	93	96	95	97	97	97
9. みんなの意見を聞いて決める学級です	80	78	87	86	79	89	92	92
10. みんなの意見を聞いて決める学級です	81	85	89	91	80	90	95	95
11. 先生だけでなく自分たちで決める学級です	80	82	92	95	92	91	92	93
12. 先生だけでなく自分たちで決める学級です	89	89	90	89	87	96	96	96
13. 先生だけでなく自分たちで決める学級です	78	83	88	91	84	88	93	92
14. 先生だけでなく自分たちで決める学級です	76	75	82	91	83	88	94	93
15. 先生だけでなく自分たちで決める学級です	81	82	86	91	87	91	94	94
16. 先生だけでなく自分たちで決める学級です	71	72	88	89	84	88	90	92
17. 先生だけでなく自分たちで決める学級です	86	79	80	91	89	95	96	99
18. 先生だけでなく自分たちで決める学級です	70	78	79	92	92	96	96	96
19. 先生だけでなく自分たちで決める学級です	91	95	97	100	99	99	99	100
20. 先生だけでなく自分たちで決める学級です	79	81	86	93	91	95	96	97
21. 先生だけでなく自分たちで決める学級です	78	83	87	91	88	93	95	95

【資料8】学級のえだまめアンケートの結果

思い出に残っている行事は何ですか? 3つ書いてください

順位	行事	票数
1位	New star fes	19
2位	貞子たちの教室 (映画)	12
3位	野外活動	7
3位	えだまめtheMovie	7
3位	夏祭り	7
6位	運動会	2
7位	カラオケ大会	2
8位	マラソン大会	1
ランク外	学習発表会	0
ランク外	縦割り遠足	0

【資料9】児童が思い出に残っている行事